

【社会福祉法人 AJU 自立の家】を訪問

御器所と桜山の間にある恵方町教会の敷地に AJU 自立の家（以下 AJU と略）があります。敷地には、車いすセンターやサマリアハウスなどの施設も建っています。AJU は、1973 年愛知重度障害者の生活をよくする会と愛の実行運動（AINO JIKKOU UNDOU）とで活動開始、その後車いすセンターやわだち作業所を開設し 1990 年社会福祉法人となって 25 年経ちました。社会福祉法人の社協として是非ご紹介したい AJU を取材してきました。

Q. AJU はどういう施設ですか

A. 障害があるという理由だけで、人任せで受身の生活を送るのではなく、一人の人として主体的に生きることを実現するための場所です。寛仁親王殿下より「障害者の下宿屋」という御提言を戴き、社会福祉法人として 17 人のスタッフで発足。現在は 140 人のスタッフと約 500 人の登録ヘルパーで活動しています。

Q. 障害者が自立生活をするための研修（訓練）の場のようなイメージでしょうか。

A. たとえば養護学校卒業後、家から作業所に通い、わずかな賃金をもらい、あとは障害者年金と家族による生活援助を受け生活する。身体的に寝たきりの人は病院で看護・介護を受けて一生闘病生活を送る。中にはずっと家から出ることなく家族が介護または生活を支え外出することもない一生を送られる方もいるでしょう。最近では障害者総合支援法により、ヘルパー派遣を受け家族の介護は楽になってきてはいますが、外出するかどうかの選択は本人ではなく家族の影響が大きいです。

サマリアハウスは暮らしの拠点として 4 年間職員やボランティア、ヘルパーに支援を受けながら、その人らしい生活力をつけるトレーニングをしています。

たとえば、社会経験が少ない入居してすぐの障害者は、部屋の電球が切れたら事務所に電球が切れたと報告します。もし、一人暮らしをしていたら、電球を自分で買いに行かれない人は、ボランティアに電球を買ってきてもらうよう連絡をして頼む、電球を自分で取り替えられない人は取り替えてくれる人をお願いする事が必要です。ボランティアはその人の手になり足になり動きますが考えること、すなわち司令塔は障害者本人でありそれが生きていく事であり生きがいになっていくと考えます。このような経験を一つずつ積み上げて一人で生活する技を学んでもらいます。

重度の身体障害で何十年も入院されていた方が、最後の力を振りしぼり独立したいという願いでサマリアハウスに入所され、一人暮らしができるまでになりました。明日の生命も危ぶまれた方でしたがいきいきして、卒業されていけました。

Q. 福祉の施設を建設する資金や場所はどのように工面されてきたのでしょうか。

A. カトリック教会のご厚意でこの場所をお貸しいただけることになっています。また、法人の設立に関しては、寛仁親王殿下が、中部経済界を何か所も訪問されて寄付してもらえる企業を探して下さるところからご尽力して下さるなど、大勢の後援者のおかげで現在の AJU があります。

Q. これだけ複雑になった組織を運営していくのは大変ですね。

A. 身体障害だけでなく知的障害、精神障害など障害の種類も多種に及び、ニーズに添って形にしていたら、ここまで広がってきた感じです。障害者自身が中心となり常に話し合う場を持ち活動し続けてきました。初期の段階でわだちコンピューターハウスなどの職場も施設内に作ってしまったのは、出勤するというイメージが掴めないのであえて敷地を離して作られています。

また、介助のシステムについては、福祉ホームの卒業生などを中心に、自分の望む介助制度はどんなものかを話し合い、現在の居宅介護保険事業所ほかっと軒（ほかっとけん人を助ける）やヘルパース

テーションマイライフの派遣事業に活かしています。

Q. ワイナリーを始められたきっかけはなんですか。

A. AJUにはわだちコンピューターハウスのように身体障害者の働く場はありましたが、知的障害者の働く場がありませんでした。作業所は以前からあちこちにありましたが、経済的自立には全く及ばない賃金でした。働く場を失ったという困った声聞くようになり、何か考えなくてはならないと考えていたところ、多治見修道院でブドウ畑の仕事の話をいただき、知的障害者の働く場として皆でチャレンジしてみようとしたことがきっかけです。ポイントはブドウを売るのではなく、ワインにしておもちゃ10個100円

知的障害者は平均月収が約2万円ですが小牧ワイナリーは15万円を目指して頑張っています。それは知的障害者の年金が身体障害者に比べて半分の5万円ほどだからです。障害者も自分の給料と年金など合わせて20万円あれば独立して生活することができます。経済的にも自立できることを目指しているのです。

Q. 障害者に対する地域社会の理解はよくなってきていると思いますか。

A. 身体障害者に対する理解はかなり良くなっていると思います。みなさんはとても親切ですし、障害者のヘルパー制度のおかげでAJUのようなスパルタ(笑)で自立に向けたトレーニングをしなくてもヘルパーさんの力など借りて一人で生活もできる人が増えてきたと思います。しかし、知的障害や精神障害については、その状態がわからない住民の不安があることは自分たちも理解できますが、病院から退院し、社会に出るまでのリハビリ施設は、体とともに心の病にも必要です。だからこそ支援し、トレーニングして社会の一員になれる努力をするのだということを理解してほしいと思います。

地域貢献はもちろん東日本大震災被災地支援、さらに日本にとどまらず、アジア障害者支援プロジェクトなど国際的にも活躍されるAJUのこれからのご活躍にみなさんどうぞ応援おねがします。

AJU自立の家 わだちまつり 2016・05・29



ごみ減量のため、皿は陶器を使用